

巻 頭 言

財団法人高輝度光科学研究センター
副理事長 放射光研究所長 吉良 爽



新しい形になった年報の第2号です。形を変えた第1号について、特段の非難の声は私のところには聞こえてきませんので、新しい形は消極的には支持された、と考える方がよいかと思っています。積極的に支持されている、という感触を持ちうるよう、地味な出版物ながら、努力していきたいと思います。

2001年度は、供用開始後4年目になり、利用研究の議論が起きた年でした。特に産業利用に関して多くの対策を行い、それが短時間に効果を挙げました

年であったといえると思います。従来、硬い物を扱う産業が主流であった産業利用に、蛋白構造解析を基にした創薬と言う、軟らかい物を扱う分野が大きな勢力として加わりました。

国が研究機関を評価する制度がありますが、共同研究所の第一号として SPring-8 が評価を受けました。それが2001年の9月に始まり、答申がすでにまとめられ近く公表されることになっています。その答申によって、今後の SPring-8 の運営が相当に変わる可能性があります。

また、2001年度は、SPring-8 をとりまく外部環境が激しく変化した年でした。まず、政府による特殊法人の見直しによって、SPring-8 の予算の主な受け皿である原研、理研の予算が一律に削減を受け、SPring-8 の運転費の不足分を競争資金でまかなうというこれまた非常に新規な方式を導入せざるを得なくなりました。今後、原研も理研も独立法人化されることになっています。その過渡期においては、位相がずれてことが進行する可能性が予測されています。ですから、しばらくは、かなりカオス的な状態の中で運営しなければならない状況が続くであろうと予測されます。しかし、このような混乱期こそ、変革の好機であると言う希望を持って、これを乗り切るしかありません。

この第2号は、SPring-8 に開業後最初に訪れた大きな転換期の記録の一部であります。将来、科学史の中でお役にたつようなことがあればと密かに願っています。